琉球大学学術リポジトリ

早くも折り返し点：
生物多様性研究の拠点形成に向けて何をなすべきか

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 琉球大学21世紀COEプログラム広報委員会
	公開日: 2007-07-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 太田, 英利, Ota, Hidetoshi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1139

早くも折り返し点：生物多様性研究の拠点形成に向けて何をなすべきか

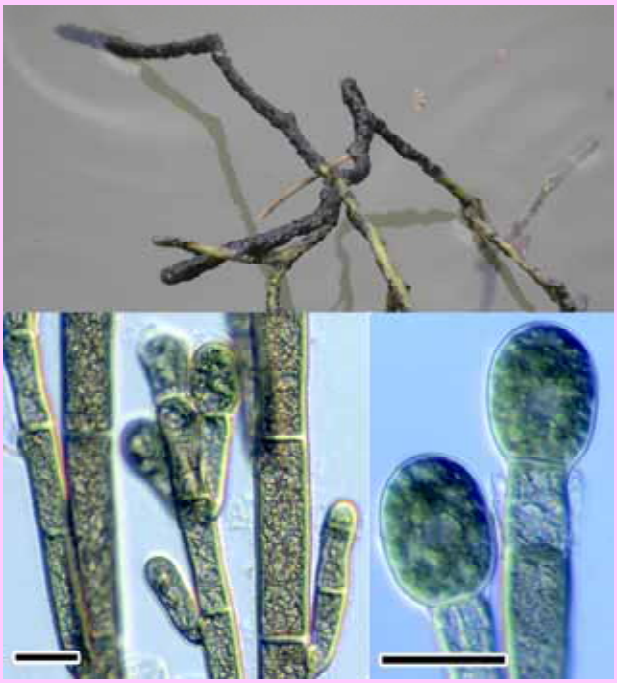
太田英利（種の多様性研究グループリーダー）

平成16年に「革新的分野」の枠で採択された琉球大学の21世紀COEプログラム「サンゴ礁島嶼系の生物多様性の総合解析」もこの4月からはや3年目が始まりました。昨年度末には中間評価に向けた資料の作成・提出があり、5月には学長、拠点リーダー、コアメンバー2名が東京の学術振興会に赴き、これまでの進捗状況に関するヒアリングも受けました。言うまでもなくこれらは先の2年間（厳密には1年半強）でのパーフォーマンスに対する評価と必要に応じた問題点の指摘を目的としたものであります。こうした評価の結果を耳にできるのはまだ少し先になりますが、要するにわれわれとしてははや後半に向けた折り返し点にさしかかっているとの認識が必要でしょう。

いまさら申し上げるまでもないかもしれませんが本プログラム課題の最終目標は、この琉球大学において革新性、総合性を前面に出した生物多様性の研究・教育拠点を打立てることにあります。このことは申請の段階から21世紀COEの趣旨としてうたわれており、学長はじめ本学執行部もこの目標に向けた全面的かつ持続的な支援を約束しています。したがってプログラムが終了した時点でそのような拠点と呼べるもの、あるいは少なくともその核となり近い将来、確実に拠点へと発展するものが出来上がっていなければなりません。そうなっていれば本プログラムは成功であったと言えるでしょうし、逆にたとえばまったくいそういっためどが立っていなければ（たとえ個々のプロジェクト参加者が多くの優秀な論文を公表し学界において高い評価を受けていたとしても）プロジェクトとしてはうまく行ったとは言えないでしょう。

かつて琉球大学の生物学関係の学部・学科・講座は「日本の国立大学で唯一、サンゴ礁やマングローブの豊かな亜熱帯島嶼に位置する」をうたい文句に、この学問分野において高いアドバンテージを握っていました。しかしながら長距離移動のための航空機利用がさらに身近になってきている現在では、このような地の利の効用は年々薄れており、もはやそれ

Photo-gallery 1　千原池の淡水産紅藻



カワモズクの一種
Batrachospermum sp.
（紅藻植物門、カワモズク目、カワモズク科）

一般にカワモズクなどの淡水産紅藻は清流や湧水などの貧栄養環境に生育するが、富栄養化した琉球大学構内の千原池に生育が確認された。現在分類学的研究を進行中である。富栄養化した環境にどのように耐えているのか、生理的な特性研究の材料としても興味深い。

池の端の植物の茎に着生している藻体（上）、分岐する糸状体（下左）、単胞子嚢（下右）スケールは20 μm。
須田彰一郎（理学部）

だけで自動的に拠点となれないのは明らかです（たとえば京都大学は、マレーシアやタンザニアなど熱帯各地に恒常的な研究フィールドを構築しています）。

昨年度後半には本学から COE への支援経費にもとづき 2 名の COE 特任教員（大瀧丈二助教授、佐藤綾助手）に加わって頂くことができ、よって今年度は研究・教育組織としてますますのパワーアップがはかれるでしょう。先にアナウンスした公募研究には学内の若手教員、ポスドク、博士課程の大学院生から多数の意欲的な応募が寄せられており、これも研究のさらなる活性化を予感させるに十分です。サマープログラムや国際シンポジウムなどの企画も昨年度と同様、目白押しです。しかしそれに加え今年度は、昨年度以上にポスト COE における「拠点形成」の実現に向け、議論を高めていく必要があろうと感じています。

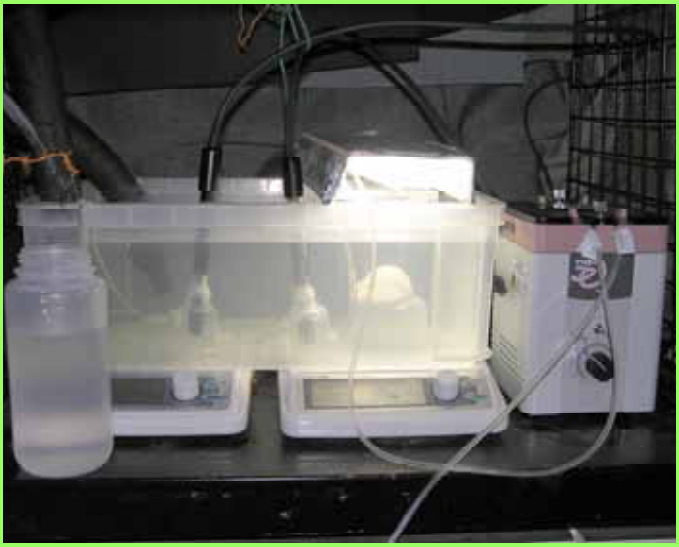
Photo-gallery 2　サンゴの「腫瘍」

ハマサンゴ
Porites australiensis
（刺胞動物門・花虫綱・イシサンゴ目）

サンゴ群体の成長に伴い骨骼が無秩序に盛り上がった部分を（写真白色部）一般に「腫瘍」と呼んでいる。患部では褐虫藻の喪失（白化）、ポリプの形成不全、生殖腺の成熟不全などがみられる。近年、多様な病気がサンゴで報告され、疲弊したサンゴ群集の攪乱要因として、看過できないものとなってきた。（写真内の枠は一辺 10 cm）

撮影：名護市嘉陽、2006 年 5 月
中野義勝
(熱帯生物圏研究センター)

Photo-gallery 3　連続流水混合実験システム



群体レベルのサンゴの代謝量を定量的に測定する実験システム

このシステムでは新鮮な海水を連続的に培養ビンに送り、サンゴ代謝量を連続的かつ長期間モニターすることができる。海水温度や光の強さをコントロールすることも可能で、海水成分等の変化がサンゴの代謝量に及ぼす影響を研究することができる。

新垣雄光（理学部）
樋口富彦（理工学研究科）